

新しいヒロイン

Great Expectations における Estella の物語 A New Heroine: Estella's Story in *Great Expectations*

高橋 沙央里

Saori TAKAHASHI

Great Expectations は *David Copperfield* と同様の男性の語り手による一人称小説である。 *David Copperfield* の出版から 10 年後に *Great Expectations* は出版された。この 2 作品は大人になった主人公が語り手として自分の人生を子供時代から語り、様々な試練を経ての成長を語るという構造、主人公をとりまく女性達の配置といった類似点が指摘される。また Dickens 自身が ‘unconscious repetition’ (Forster 285) を避けるため、 *Great Expectations* の執筆前に *David Copperfield* を読み返したというエピソードも残っている。しかしながら、この 2 作品はまったく異質の作品であり、その一つはヒロインの女性にみられる変化である。 *David Copperfield* は中流階級の紳士として David がどのような女性を妻とするべきかを追求した作品であり、その理想的な妻となる Agnes は ‘angel in the house’ の代表的な例とされる女性である。それに対して *Great Expectations* のヒロイン Estella は Dickens の典型的なヒロイン像からかけはなれた女性であるとしばしば指摘される²。 David が中流階級の紳士の語り手として、その到達点である Agnes との結婚という結末へと物語を統合させていくとすれば、全く異なる女性を追い求める Pip が語る物語である *Great Expectations* の物語の構造はどうなるであろうか。 Agnes が David の人生の導き手であり、彼の人生の充足を保証する役割を担うのに対して、 Estella がいかに伝統的なヒロインとしての役割を裏切っていくのかを *Great Expectations* の物語の構造から見ていく。

Great Expectations という Pip によって語られる物語における Estella の最初の役割は、 Pip の物語の破壊である。鍛冶屋の Joe に育てられた Pip のそもそもの物語は、適切な年齢になったら徒弟として Joe の元で学び、やがては鍛冶屋を継ぐこ

とであった。Estella と出会う前の Pip はその人生になんの疑問も抱くことはない。しかし、Estella と出会い彼女に魅了された Pip は “He calls the knaves, Jacks, this boy!” [. . .] “And what coarse hands he has. And what thick boots!” (60) という Estella の侮辱の言葉によって自分の環境を恥ずかしいものとして感じるようになる。この日から鍛冶屋になるという人生は Pip にとって受け入れることのできないものとなってしまう、Pip は紳士になりたいと熱望するようになるのである。原英一氏は *Great Expectations* は Pip の物語が他者によって書かれ、その物語が解体されていくという構造を持つと指摘し、Estella との出会いを「このとき以来鍛冶屋の徒弟としての彼の生は、彼が書くべき物語ではなくなり、階級社会とその制度という他者が書いて押しつけたものとなってしまったのである」(104-105) と指摘する。Estella は Pip に本来生きるはずであった人生を否定させ、Pip のそもそもの物語を破壊するのである。

Estella が Pip に体现するのは Pip が勝ち取るべき「階級社会とその制度」そのものである。鍛冶屋としての人生を否定し始めたときから、Pip にとって Estella は経済的成功、階級の上昇、幸福のすべてを象徴する存在となり、最後に到達すべきゴールとなるのである。そして Estella を勝ち取るために紳士になろうという野心を抱いた Pip は、遺産相続の見込みが転がり込むという野心の実現へ向けた第一歩を踏み出す時点で夢の世界へと入り込んでしまう。Pip は Estella の養母である Miss Havisham が自分と Estella を結婚させようとしていると信じ込み、Miss Havisham は自分を紳士にしてくれるために投資をしてくれる恩人であると誤解する。実際には恩人は囚人 Magwitch であり、Miss Havisham は婚約者に騙されたことへの復讐を果たすために Pip の Estella に対する愛を利用しているだけである。こうして *Great Expectations* という物語は、物語の中に Pip の夢が存在する二重の構造となる。

Pip の本来の物語を壊し、夢の中に入り込むきっかけを与えた Estella は Pip にとってこの夢の実現の可能性を脅かす存在となる³ Estella は Miss Havisham の計画通りに美しく冷たい貴婦人に成長する。遺産を相続する見込みができ、紳士への道を歩き出した Pip は Estella と再会したとき次のように述べる。

I fancied, as I looked at her, that I slipped hopelessly back into the coarse and common boy again. O the sense of distance and disparity that came upon me, and the inaccessibility that came about her!

(235)

Estella は Pip に自分達の人生がかけはなれているという事実をつきつける存在である。さらに Estella にとって Pip は将来の結婚相手として決められている人物ではない。Miss Havisham の復讐の道具として育てられた Estella はすべての欲望の

実現を象徴するゴールというPipに与えられている役割を果たすことはない。EstellaはPipの愛をもてあそび、傷つけるという役割をMiss Havishamによって与えられ、その役割を果たすために高慢で冷たい女性へと成長するのである。

しかし、Pipの夢の破壊はEstella自身の意図によっても行われる。Hilary M. SchorはEstellaについて次のように述べている。

No character points out his shallowness throughout more effectively than Estella, questioning and teasing him, mocking his efforts to be his own hero. [...] no character so writes her own novel, escaping Pip's monomaniacal obsession, than Estella, who throughout is wiser, sadder, and funnier than Pip, — and who is the character most entirely “bent and broken” by the novel into another form.

(154)

PipがMiss Havishamに支配されるままにEstellaというゴールへ辿り着きたいと願っているのに対して、EstellaはMiss Havishamに支配される人生から訣別しようとしていく。EstellaはPipの夢の中で与えられた役割だけでなく、Miss Havishamによって与えられた役割も拒否するようになるのである。Pipの夢の破壊者としてのEstellaを見ていくことで、Estellaの物語が確立される過程を見ることができる。

Pipの夢の破壊はPipに対する警告という形で現れる。Estellaは自分を愛さないようにPipに言い続けるのである。二人が成長してから再会したときに、Estellaは自分には‘heart’ (237)がなく、自分達がこれからもっと一緒にいるのならそのことを知っておく方がいいとPipに警告する。Pipはこの言葉を信じようとしなないが、Estellaは自分を愛することをやめるように何度も言う。Estellaの“Do you want me then [...] to deceive and entrap you?” (311)という質問はもっとも明白な警告である。Schorが‘she has the ability to put him off balance, to begin his story again’ (155)と指摘するように、PipがEstellaの警告を真剣に受けとめ‘heart’を持たないということを理解すれば、夢から目覚めて物語を再び始めることができたかもしれない。EstellaはPipの自分に対する愛を拒否することで、Pipを夢から目覚めさせようとするのである。

Pipに自分を愛さないように警告するということは、Miss Havishamに与えられた役割を拒否するということにもなる。「畏にかけてほしいのか」という質問に対してPipが“Do you deceive and entrap him, Estella?” (312)と質問すると、Estellaは“‘Yes, and many others — all of them but you’” (312)と答える。PipはEstellaに愛されないことで苦しんでいる。Pipの愛を理解できないEstellaは、Pipを畏にかけて傷つけることはできるが、そうすることは望まない。他の人を傷つけるようにPipも傷つけるのを避けようとするEstellaに唯一できることは、自分を愛することをやめるように説得することだけである。Estellaの警告はPipの苦しみを根源

から救うものである。これは Miss Havisham の意図とは正反対である。

また、Estella は成長するにつれて自分に人生の決定権がないことを認識するようになる。Pip とロンドンで再会したときに Estella は “We have no choice, you and I, but to obey our instructions” (265) と言う。選択権がないということは Pip の夢想では Estella と結婚するように決められているという幸運であるが、Estella にとっては Pip を傷つけるという望まない役割を果たさなければならない苦しい状態である。Estella が二人の関係を誰かに押し付けられているかのように振舞うとき、Estella は Miss Havisham に与えられた役割を果たすことに抵抗を感じていると考えることができる。また、決定権がないことに対する Estella の認識は、彼女の自己意識の表れでもある。自分の人生を自分で決めることができない苛立ちは、自分が養女にされたときの状況に対する “At least I was no party to the compact” [. . .] “for if I could walk and speak, when it was made, it was as much as I could do” (304) という説明にはっきりと表れている。Angus Willson は Estella について ‘we do see, in her resistance to other’s management, a recognition of a woman as an individual having her own demands on life’ (271) と述べている。Estella にとって大切なことは自分の人生を自分で決められるかどうかである。人生の決定権のなさを認識することは、Estella が自分の物語を書くための第一歩である。

Pip の夢想は Magwitch が彼に会うためにイギリスに戻ってくることによって終わりを迎える。Pip は自分の本当の恩人は Magwitch であり、Estella は自分と結婚するように決められてなどいないことを知る。しかし、Pip が求めていたゴールは存在しないことを改めて知らせるのは Estella 自身である。Pip は Estella のことを ‘mine’ (362) と呼ぶことができる可能性はなくなったが、それでも愛しているのだと言う。Pip は遺産相続の見込みがなくなったために Estella を失うのだと考えているが、Estella は Pip が遺産を相続しようとしまいと Pip と結婚することはできない。なぜなら、Estella が何度も Pip に忠告しているように、Estella には Pip の愛が理解できないからである。Pip が Estella に ‘heart’ がないなどということは “Surely it is not in Nature” (362) というのに対して、Estella は “It is in my Nature” (362) と答える。Pip が夢想から目覚め、それでもなお Estella を愛していると言うならば、Estella は二人の間には埋められない溝があるのだということを改めて伝えなければならないのである。Drummler との結婚によって Estella は Pip を自分から切り離す。 “Should I fling myself away upon the man who would the soonest feel (if people do feel such things) that I took nothing to him?” (364) と聞いていることからわかるように、Estella にとっては Pip に遺産相続の見込みがあるかどうかではなく、Pip が自分から愛を得ることができないことに苦しむという事実が問題である。

Estellaの‘nature’を理解しないPipを‘visionary boy’(364)と呼び、EstellaはPipに別れを告げるのである。

Drummlerとの結婚はEstellaのMiss Havishamとの決別も意味する。Pipはこの結婚をMiss Havishamの教育の結果であると解釈するが、EstellaはMiss Havishamによって支配される人生をこの結婚によって終わらせるのである。Miss HavishamはEstellaを愛している多くの男性を傷つけるために彼女をDrummlerにくれてやるのだというPipに対して、“It is my own act”(364)と答え、さらに“‘As to leading me into what you call this fatal step, Miss Havisham would have had me wait, and not marry yet; but I am tired of the life I have led, which has very few charms for me, and I am willing enough to change it’”(364)と自分の選択を説明している。Drummlerとの結婚は、自分には何も決める権利がないと知っていたEstellaが初めて自分自身で下した決断である。この決断がMiss Havishamの計略では一番傷つくはずであったPipを救うという意図を含んでいることを考えれば、Drummlerとの結婚によってEstellaはMiss Havishamに与えられた物語をこの時点で放棄したと言える。

結婚によってEstellaはPipの物語から一度姿を消す。ここでPipは本来の自分の物語であったはずの、鍛冶屋としての人生へと帰ろうとする。Pipは幼馴染だったBiddyと結婚しようとする。紳士になりたいと願っていた子供時代からPipはBiddyを愛することができればもっと幸せになれるのにと考えていた。これに対してBiddyは“‘But you never will, you see’”(131)と答えている。Pipが紳士になりたいと願い始めたときから、自分達は違う物語の中に存在しているのだとBiddyは指摘しているのである。しかしながら、PipはBiddyが‘like a forgiven child’(472)のように自分を受け入れてくれるかもしれないと考え、空想の物語から戻るべき物語としてBiddyのいる物語を選ぼうとするのである。BiddyはJoeとの結婚を宣言することで、Pipの選択を拒否する。Martin Meiselは‘But chastened and forgiven as he is, Pip is not permitted to go back to Biddy any more than to Joe. He can neither regain nor remake any stage of the past’(328-329)と指摘する。紳士になりたいという野心にとりつかれて、JoeとBiddyのいる物語を捨ててしまったことは過ちであると気がつき、後悔し改心して元の物語へ戻ろうとするPipの試みは実現されない。

子供の頃Pipに好意を抱いていたBiddyが、Pipが間違いに気がつき自分の元へ戻ってくるのを待っていてくれたならば、*Great Expectations*は*David Copperfield*と同質の物語になっていたはずである。F・シュタンツェルは「古典的」な一人称小説では「<物語る私>がどこにでも常に存在していて、重要な注釈をその都度さしはさむことによって、<体験する私>と<物語る私>との平衡が生まれ

る。…また一人称小説のこうした形式は、両方の「私」のあいだに展開する緊張の磁場が結局常に和解へと導かれる」(213-214)と述べ、*David Copperfield*をその好例として挙げている。語り手Davidがすべての試練、とりわけDoraとの結婚を語る時、Agnesこそが自分が選ぶべき人であるということに気がつかなかった自分の浅はかさを嘆くことで、体験するDavidとの間に平衡が生まれ、最終的にAgnesとの結婚へと到達することで、幸福な結婚生活を送りながら物語を書いていたDavidと体験するDavidは和解する。Agnesとの結婚へと辿り着いたDavidにとって物語はそれ以上展開するものではない。*David Copperfield*はすべてが最終的に結婚によって解決され、AgnesはDavidの物語を支える力という存在になる。物語を語るPipがJoeを捨てたことを愚かなことであったと度々注釈しているように、PipもDavidと同様に本来自分が居るべき場所を誤解するという過ちを犯していることを説明する。BidlyはAgnesと同様にPipの導き手であり、理解者でもあった。Bidlyに受け入れられ結婚することで、愛するに値しない女性を愛したPipが結婚するにふさわしい女性へと辿り着き、道徳的人格の変貌を遂げたとして物語に幕を下ろすことが可能となるのである。EstellaとDoraを、AgnesとBidlyを対比させるならば、Pipの物語を自分との結婚で終わらせることを拒否するBidlyもまた伝統的ヒロインとしての役割を拒否する女性であるといえる。

Bidlyとの結婚によって物語を終わらせることができないPipの物語の結末はどうなるであろうか。*Great Expectations*には二つのエンディングがある。‘original ending’と呼ばれるDickensが最初に用意した結末と、Bulwer-Lyttonのアドバイスにしたがって書き直され出版された‘second ending’である。どちらのエンディングでもPipとEstellaは再会を果たす。両方のエンディングを比較し、それぞれのエンディングでのEstellaの役割を検討したい。

まず、‘original ending’から見てみる。‘original ending’ではPipはBidlyにEstellaのことで心を悩ませていないのかと聞かれ、“I am sure and certain, Bidly” (508)と答える。PipとEstellaはその2年後にロンドンの雑踏の中で偶然につかの間の再会をはたす。EstellaはDrummlerとの不幸な結婚生活を送り、彼の死後シロップシャーの医者と再婚しているとPipによって説明される。Estellaの言葉は“‘I am greatly changed, I know; but I thought you would like to shake hands with Estella too, Pip. Lift up that pretty child and let me kiss it!’” (509)だけである。このEstellaとの再会をPipは次のように解釈し、物語は終わる。

I was very glad afterwards to have had the interview; for, in her face and in her voice, and in her touch, she gave me the assurance, that suffer-

ing had been stronger than Miss Havisham's teaching, and had given her a heart to understand what my heart used to be.

(509)

Pipは自分の人生を狂わせたMiss HavishamとMagwitchとは和解を果たしているといえるし、二人は死んでしまうことでPipの物語から完全に消えている。Bidlyとの結婚が叶わなかった後、11年間外国で暮らし、クラリカー商会の事務員として真面目に働くことで過去の過ちの償いもしている。そしてPipの本来の物語を破壊し夢想の世界へと入り込ませ、JoeとBidlyを捨てさせ、Pipの愛を傷つけたEstellaの改心を確信し和解することで、Pipの教育は完成され物語は終りを迎えることができる。‘original ending’ではEstellaの変化はEstellaによって語られることはなく、変化したEstellaはPipが自分の過去と和解するための存在である。Drummlerとの結婚によって物語から姿を消したEstellaが再びPipの物語に戻ったときに、Estellaには自分の物語を語るチャンスは与えられない。‘original ending’は結婚という形ではなくとも、Pipの精神的成長は最終段階を迎えたとして物語を終わらせ、EstellaはPipの過去の気持ちをご正当化させることでPipの物語を支える力としてPipの物語に組み込まれる。

しかし、‘second ending’ではEstellaの果たす役割は大きく変化している。Estellaが再び自分の物語を語る事が可能となっている。‘second ending’ではPipがBidlyの質問に対して“O no – I think not, Bidly” (481)と答えながらも、その日の夜Satis Houseを訪れようと考えていることから、PipがまだEstellaを愛していることがわかる。そしてSatis HouseでEstellaと再会する。ここで交わされる会話は圧倒的にEstellaの発言のほうが多い。Estellaは自分の変化について自分で語る。

“[. . .] now, when suffering has been stronger than all other teaching, and has taught me to understand what your heart used to be. I have been bent and broken, but – I hope – into a better shape.”

(484)

このEstellaの説明は、Miss Havishamから自分の人生を切り離すことを願ったDrummlerと結婚した彼女の選択が結果的に正しかったことを示す。Miss Havishamと決別するだけでなく、彼女に奪われた‘heart’を取り戻すことにも成功している。‘second ending’ではEstellaはPipの精神的成長の完結を保証するためではなく、自分が葛藤してきた問題を克服したことを証明するために自分の変化について語っている。Drummlerとの結婚によってMiss Havishamに用意された物語を捨てたが、その結婚によって語る事が不可能となっていたEstellaは、Drummlerが死に、人間的な欠陥を克服し、Pipと再会することで物語を語る機会を再び得るのである。

そして Estella は再び Pip の物語を壊そうとする。 *Great Expectations* は ‘I saw the shadow of no parting from her’ (484) という Pip のナレーションで終わる。しかし Pip のこのナレーションの直前に Estella は “‘Be as considerate and good to me as you were, and tell me we are friends’” (484) と自分達の関係に決断を下し, “‘and will continue friends apart’” (484) と言っている。 Estella が自分の気持ちを理解したと言いま, “you have always held your place in my heart” (484) と言い, Estella を今でも愛している Pip は物語を Estella との結婚という結末で終わらせようとしているように思われる。しかし, Estella は Pip が書こうとした物語の結末を友達でいるという結論によって壊すのである。

しかし, *Great Expectations* は Estella による Pip の物語の破壊で終わるわけではない。 Pip の最後のナレーションは語り手 Pip が物語りの締めくくりとして書いたものではなく, Pip がこの時点で抱いた印象であると解釈できる⁴。 Pip がこの物語を書いているのはエンディングから 20 年後である。 Pip は 20 年間の空白を埋めることなく物語の途中で語るのをやめる。 シュタンツェルが一人称形式の小説では, エンディングがすべての問題が解決される和解地点となる点が古典的であると指摘し, 問題が残されたまま終わる小説は数が少ないと指摘するが(214), *Great Expectations* はこの数少ない例の一つと言えるのではないだろうか。 また Jerome Meckier は ‘second ending’ をオープンエンドであると解釈している⁵。 Meckier は Dickens は結婚というハッピーエンディングまたは完全な別離によって人生そのものがそれ以上展開しない最終段階に到達するという結末を避けようとしたと述べ, 結婚するにしろしないにしろ, Pip と Estella の前に時間が続いていることを示していると述べる。 ‘original ending’ は Pip が Estella への想いを捨て, 精神的成長が完成したことを示すことでクローズド・エンドであると同時に, Estella の物語は語ることがない。 それに対して ‘second ending’ は Pip と Estella にはこれからの物語があることが示されるのである。 Estella と Pip がそれぞれに過去の過ちを理解し, 問題を克服し, 再会した後どう生きていくかはまた別の物語である。 そして語り手 Pip は自分の人生の最終段階としてエンディングを語らないことで, Estella には Estella 自身が語る物語がこれからはあるのだという可能性を示すことを許すのである。

Great Expectations は一人称小説の新たな形である。 Estella が伝統的なヒロインでないのは, 冷たく愛情のない性格ゆえだけではない。 ヒロインである Estella は主人公 Pip の物語を破壊する存在である。 さらに自分自身の物語を書くために葛藤している。 Pip に与えられた役割も, Miss Havisham に与えられた役割も拒否することで, Pip が語る物語の中に存在するにもかかわらず Estella は自分には自分

が語る物語があるのだということを示唆する。EstellaはAgnesのように主人公Pipの物語を満たすために存在するのではなく、自分の物語を探ることによって伝統的ヒロインの役割を裏切る。そしてPipが語る物語の結末でEstellaは自分自身によって語られる自分の物語の始まりを示すことを許されている。*Great Expectations*をオープンエンドにすることでDickensは新しいヒロインとしてのEstellaの勝利を示したといえるのである。

注

- 1 作品の類似点に関して Hilary M. Schorは “Adept Dickens readers might note the specifics of the reprise: the return of Dora and Agnes in Estella and Biddy; [...] the careful regret and hard-won wisdom of the first person narrator and the romance of maturity” (153)と指摘している。
- 2 Merryn Williamsは ‘The women in *Great Expectations* (except Biddy) are completely different from their predecessors. In this novel it is the man whose heart is wrung by the coldness and cruelty of women, not the other way round’ (86-87) と述べている。また Michael Slaterは ‘*Great Expectations* is a novel without a heroine to love and admire’ と述べている(282)。
- 3 Peter Brooksは *Great Expectations* には ‘official plot’ と ‘repressed plot’ という二重のプロットがあり、‘the fairy tale’ としての表向きのプロットの中でPipは進歩しているかのように見えるが、Satis Houseでは ‘the witch tale’ という ‘repressed plot’ がその進歩を否定し ‘coarse and common boy’ の地位へ後戻りすると指摘している。そしてこの回帰という形で ‘official plot’ はPipの人生の本当のプロットである ‘repressed plot’ へと服従するのだと論じている(*Reading for the plot: Design and Intention in Narrative*を参照)。
- 4 Angus CalderはPipの言葉には ‘[...] at this happy moment, I did not see the shadow of our subsequent parting looming over us.’ (496)という意味が含まれているとし、Pipがその瞬間に抱いた感情であると解釈している。また、Jerome MeckierもPipの最後の言葉について ‘he states that on a specific evening in a specified place, he was unable to foresee another parting – a statement one must certify as truthful regardless of subsequent events. Pip divulges all he knew or could have known at the time’ (44) と解釈している。
- 5 MeckierはDickensが ‘second ending’ を書く際に意図していることは、登場人物達の人生を終わらせることなく結末を描くことであると指摘し、二つのエンディング、同時代の作家による作品のエンディング等を比較しつつ、‘second ending’ がオープンエンドであることを論じている。

Works Cited

- Brooks, Peter. *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative*. Cambridge: Harvard UP, 1995.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. Ed. Angus Calder. Harmondsworth: Penguin, 1965.
- . *Great Expectations*. London: Penguin, 1996.

- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 2 vols. London: J.M. Dent and Sons, 1966.
- Meckier, Jerome. "Charles Dickens's *Great Expectations*: A Defense of the Second Ending." *Studies in the Novel*. 25 (Spring 1993): 28-58.
- Meisel, Martin. "The Ending of *Great Expectations*." *Essays in Criticism*. 15 (1965): 326-31.
- Schor, Hilary M. *Dickens and the Daughter of the House*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: J.M. Dent and Sons, 1983.
- Williams, Merryn. *Women in the English Novel, 1800-1900*. London: Macmillan, 1984.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker and Warburg, 1970.
- F・シュタンツェル 『物語の構造 <語り>の理論とテキスト分析』前田彰一訳，東京，岩波書店，1989.
- 原英一 「物語の不在と不在の物語 チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』の場合」『現代批評のプラクティス1 デイコンストラクション』富山太佳夫編，東京，研究社，1997.